

創作ダンス授業の成績評価方法に関する一考察 —「知識・技能」「思考・判断・表現」に着目して—

岡 千 春
君和田 雅 子
杉 山 り ん

1. はじめに

平成24年度から中学校におけるダンス授業の必修化が実施され、10年以上が経過しているが、指導する教員の指導不安や、指導内容の曖昧さなどの課題が未だ解決せず^{1, 2, 3}、令和3年の中学校指導要領改訂後の現在においても、体育におけるダンスの授業の在り方には検討・改善の余地があると推察される。

中村（2010）の調査においては、ダンス授業の実施率は増えるが、指導教員の不足や指導研修の実施率の低さから、学習内容や学習の質は低下する可能性が示唆されている¹。ダンスの授業の男女必修化に対する教員の評価は、肯定評価36.8%、否定評価35.9%、わからない27.8%であり、否定評価の理由として、「指導教員の不足」51.7%、「不安」42.9%、「羞恥心が強い年頃なので自己表現は難しい」32.1%などが挙げられていた。

松本ら（2013）は現職の教員向けのダンス指導法実技研修において、研修前の教員不安要素、研修によって得られた成果について分析しており⁴、ここでは「生徒が上手く動いてくれるか」、「異性の生徒への指導」などが不安上位であったが、「単元全体の授業遂行」、「表現や作品の評価の仕方」、「学習評価の仕方がわからないが故の不安」も下位の不安要素として挙げられていた。こうした、表現や作品の評価への不安、ダンスの学習評価に対する不安は、実技研修でも解消しきれていないことが読み取れる。これに関連して、酒向ら（2016）は、ダンスの表現の自由性、正解のない「ゴルフフリー」であるという特徴に起因する指導の困難さについて指摘している⁵。

また、熊谷・中川（2014）の調査では、体育という教科の中でダンスの評価を下す難しさが示されている⁶。体育授業の中で扱うダンスは、最終的な目的をどのように定め、その達成をどのように評価すべきか、特にダンス経験のない体育教員にとっては、学習指導要領のみで判断するのは容易ではないことが推察される。したがって、ダンス経験のある教員と経験のない教員では、指導内容はもちろんのこと、学習目標の設定の仕方や評価方法の面にも明確な差が生まれるといえる。

これらの背景から、指導要領改訂後のダンス授業の学習目標および評価方法をどのように捉えるべきか、明確にする必要があると考えた。本研究では、3つの学習目標のうち特に評価の難しさがダンスの特性に起因すると考えられる、「知識・技能」「思考・判断・表現」に着目することとした。まず改定後のダンスの学習目標について、「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点に沿ってみていきながら、創作ダンスにおける学習目標と学習評価方法について整理する。そして「知識・技能」「思考・判断・表現」の観

点からどのように創作ダンスの成績評価がなされるべきか、文献研究および中学校体育教員への面接調査の結果をもとに明らかにすることを目的とする。

2. 指導要領に見るダンス授業の目標と評価法について

2-1. ダンス単元の学習目標

令和3年度より実施されている現行の学習指導要領（中学校）において、学習目標は『知識・技能』、『思考力・判断力・表現力等』、『学びに向かう力・人間性等』を育成することとされている⁷。改定前の学習評価観点は「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「知識・理解」「技能」の4観点であり、改訂後は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学びに向かう力」の3観点となっている。

この改定によって、学習目標における「資質・能力の三つの柱」がより明確につながり、各領域の学習目標および内容は、この三つの柱の育成を重視する観点から設定される。ここで2019年の中央教育審議会では、「思考・判断・表現」の評価方法について、「論述やレポートの作成発表、グループでの話し合い、作品の制作や表現等の多様な活動」の評価、いわば「パフォーマンス評価」の取入れを示している⁸。木原（2020）は体育科における試合や発表会はパフォーマンス評価として見なされるとしつつ、「体育科でしか育成できない資質・能力があることを発信」し、「試合や発表会で活用できる「知識」や「技能」、思考力、判断力、表現力」の評価方法のさらなる探求が求められる」と述べる⁹。このように、三つの柱の観点から体育の授業目標および評価方法の見直しを行うことが指導要領改訂後の課題であると考えられ、ダンス領域においても同様の議論が今後も続くことが予測される。

中学校でのダンス授業は「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」の3つから選択して実施するよう提示されており、それぞれのダンスにおいて「資質・能力の三つの柱」に基づいた学習目標の設定がなされている。高橋（2017）による調査では、全国の中学校におけるダンス指導状況はリズム系8割、創作系6割、フォークダンス系4割という結果であった¹⁰。中村（2003）による、高等学校体育教員を対象としたダンス評価に関する質問紙調査では、創作ダンスにおいて教員は「創作力」、「表現力」、「鑑賞力および感じあい」などのねらいを高く評価し、現代的なリズムのダンスにおいては、「技術（リズムを捉えることや動きの工夫）」をねらいとして高く評価する傾向にあることがわかっている¹¹。ここから中村は、現代的なリズムのダンスにおいて、ダンス単元の目標となっている「自由な表現」への指導の展開には至っていないことを指摘する。関連して中村（2009、2010）は、実技経験・指導経験のない男性教員がダンス授業を担当するケースが増えるに従い、今後も現代的なリズムのダンスの実施率が高くなると予想し、定型の一斉指導や映像教材を用いた、指導不在の振り移し学習（習得学習・模倣学習）に陥る可能性を危惧している^{11、12}。その背景として、既成の振付を模倣する習得学習と比べ、自由な表現への指導が目指される創作ダンスは学習目標や評価方法の理解および実施に高い専門性が求められる点が考えられる。

既成の振付によって技術を習得していくことができる現代的なリズムのダンスはスポーツ的側面が強く、特に技能面における評価のしやすさも要因となり、ダンス授業の単元のなかでも実施率は高いまま推移している。しかし酒向（2020）は、ダンス学習の主軸は創作型学習にあるとし、正解のないものに対し他者との協働のなかで「解」を見いだしていく形態に「探求型学習」としての価値を見いだすことが出来るとする¹³。先に述べたように、創作ダンスは学習指導や評価法にダンスの専門性が求められるという点から、特にダンス未経験の教員から避けられる傾向にあることが推察され、習得型・模倣型の学習として展開しやすいリズム系ダンス中心のカリキュラムに偏り、結果としてダンスの本質的な学習目標である探

求型学習の達成が困難となることが危惧される。ここから、ダンス未経験の教員でも探求型学習である創作ダンスを指導できるようにするために、適切かつ効果的な創作ダンスの指導法と評価方法を示す必要があると考えられる。

したがって、本研究では創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンスのうちの「創作ダンス」について取り上げ、現行の指導要領における創作ダンスの学習目標、内容、評価についてみていくこととする。

2-2. 創作ダンス授業の「知識・技能」

現行の学習指導要領において、創作ダンスの知識及び技能は次のように提示されている⁷。

「感じを込めて踊ったり、みんなで自由に踊ったりする楽しさや喜びを味わい、ダンスの名称や用語、踊りの特徴と表現の仕方、交流や発表の仕方、運動観察の方法、体力の高め方などを理解するとともに、イメージを深めた表現や踊りを通じた交流や発表をすること。」

知識においては、「ダンスの名称や用語」、「踊りの特徴と表現の仕方」「交流や発表の仕方」「運動観察の方法」「体力の高め方」を知ることが目指され、創作ダンスの技能としては「表したいテーマにふさわしいイメージを捉え、個や群で、緩急強弱のある動きや空間の使い方に変化を付けて即興的に表現したり、簡単な作品にまとめたりして踊ること」を身につけることが目標とされている。

高田（2020）は、これまでの学習目標における「技能」「知識」の捉え方について、今まで「知識・理解」と「技能」がそれぞれ単独であったところから、「知識・技能」としてまとまったことによって、より知識と技能のつながりを意識した指導が求められると述べている¹⁴。つまり、技能の習得が叶わない場合でも、正しく理解していることにより評価へ繋がる可能性が生じ、「豊かなスポーツライフの実現にさらに資する」ことが展望されている¹⁴。知識の評価方法としては、「児童生徒の授業中の動きや発表、吹き、学習カードや振り返りシートへの記述等で見取ることが想定される」と高田は述べている。創作ダンスの知識・技能の評価として、生徒がダンスとしての動きの特徴や表現方法を知り、イメージを捉えて即興的に表現したり作品にまとめることができているか、互いの動きを観察したり発表作品を通じた交流ができているかという点について、授業中の様子と授業後の記述から見取ることが求められる。

ここで柗（2019、2020、2021）は、創作ダンス、現代的なリズムのダンスの「技能」と関連した「知識」が明確でないことを指摘し、技能の観点の構造化を試みている^{15、16、17}。この構造化により、動きについての知識理解や動きの観察を行いやすくし、ダンスの「技能」の指導・評価の一助となることが示されている。関連して相馬（2018）は、現代的なリズムのダンスの指導法授業において、ルーブリックの活用によって学習者の技能・知識の習得到達度を促進する可能性を示している¹⁸。

ダンスの技能の構造化あるいは尺度表の使用は、学習目標の明確化に加え、「どのように評価すればいいかわからない」といった教師の指導不安に対する補助となりうるものである。しかし同時に、技能を身につけることこそが学習目標となる「技能偏重」となる可能性も持っているといえる。高橋は今日のダンス授業の内容において、技能への偏り傾向があり、学習目標の誤解が生じる危険性を指摘している³。

先述のように、リズム系ダンスの実施率、実施時間数が今後も増加する傾向がある中、ダンスの知識・技能の概念化・構造化が進み、結果としてダンスを専門として学んでいない体育教員にも学習評価がしやすくなると推察する。その一方で、特に創作ダンスの学習評価については、動きだけではない創作技能の

側面からの評価や、知識の応用の評価について、専門的な視点からの議論が必要であるともいえるだろう。高田（2020）の指摘にあるように、ダンス領域においても「動けるようになる」だけではない技能・知識の見方、学習目標及び評価方法の在り方について、さらなる検討が求められる。

次に、ダンスの「思考力・判断力・表現力」は次のように提示されている。

「表現などの自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。」

これはダンスの3種目（創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンス）に共通しており、どのダンス種目であってもこのプロセスを踏んだ学習が目指されている。高田（2020）によると、体育科において「思考、判断」が発揮される場面は、少しずつ難しい運動に取り組む中で自己の課題を見付ける課題発見の段階、課題解決のために活動を工夫・応用する段階、試行錯誤して粘り強く取り組む段階の3段階に整理される。そして教師は指導するにあたり、生徒が思考、判断したことが動きや学習カードへの記述に表れるようにすることが重視される。評価においては、「児童生徒がどんな点に留意し活動を進め、どんな気づきや思考の深まりが見られたのか」を生徒の言動や学習カードの記述等から見取ることが重要であるとされる。「表現」については、思考・判断したことを他者にどう伝えているかを見取る必要があり、言葉や文章、身振りなどによってアウトプットできるように指導し、適切に評価することが求められている。高田は、「思考・判断・表現」の適切な評価へ向けて、教師の介入に加え、思考・判断したことの見える化、児童生徒相互の見合いや教え合いを重視し、コミュニケーションの輪を大きくすることの二点に留意することが重要であると述べる。また創作ダンスの授業においては、グループでの作品創作・発表を行うよう要領解説に明記されており、この作品創作・発表のプロセスは、「思考・判断・表現」の重要な評価対象となることがうかがえる。

山崎ら（2020）は、これまでの創作ダンスの評価においては「技能」への着目が目立つが、学習指導要領改訂の流れに合わせ、「思考力・判断力・表現力」の観点からの評価が今後求められることを予測しつつ、ダンス授業における「思考・判断・表現」について、行動観察によってこれら进行评估することは容易ではないとし、ワークシートを用いた評価方法の定量化を試みている^{19, 20}。ここでは、ワークシートの記述から「思考」のプロセスの定量化が実現することが示唆されているが、「追求の度合い」の広がりや深まりについての可視化、「共通する技能を起点にしてそれぞれのテーマに拡がっていくことを学習者ができるような授業展開や課題の提示の仕方」については課題が残されているとしている。

このように、創作ダンスの「知識・技能」「思考・判断・表現」は、ある側面は規準を設け定量化することが可能であるが、一方で完全な定量化が困難な側面があることがうかがえる。

酒向（2020）は、ダンス学習のゴールフリーという特性が、「何をどう教えたらよいかわからない」といった、教員の不安や戸惑いをもたらすと述べる¹⁴。ダンス作品の創作場面や作品発表において生徒の動きや発言を教師が観察し、専門的視点から評価を行うことが必要な創作ダンスの領域において、ダンス未経験の教師に適切な指導と評価に対する不安が生じることは自明である。したがって、創作ダンスの技能や授業指導スキル、評価の観点がより具体的に分かりやすく提示されることによって、教師の指導不安の解消や探求型学習としての創作ダンス授業の定着がより促進されると予測される。

3. 創作ダンスの学習目標と評価方法：現状と課題

ここまで述べてきたように、ダンス授業の学習目標と成績評価の方法との関係性について、曖昧さの解消がされておらず、より具体的に指導につなげやすい目標・評価方法の検討について議論されるべきである。

ここでは、先行研究およびダンスを専門とする教師らによる指導の手引き書²¹を中心に、創作ダンスの授業における学習目標とその評価方法について、より具体的にみていくこととする。

3-1. 「知識・技能」

創作ダンスにおける「良い動き」について、細川・佐藤・宮本（2005）は、項目を抽出し技能評価規準表を作成している（表1）²²。さらに宮本（2005）はこの規準を基にパフォーマンス評価のためのチェックリストを作成しており、より学習目標と評価基準を生徒にわかりやすく共有する手立てを探っている（表2）²³。さらに中村（2021）は、創作ダンスで学ばせたい技能について、松本の先行研究を整理した上でまとめている（表3）²⁴。中村は、ダンス授業において、作品化に必要な技能の一つずつピックアップして学習することが出来るとし、学ぶべき技能（運動技能・創作技能）が内在するテーマや題材を示している。また、技能を表すキーワードは「ダンスキーワード（DKW）」として、毎回の授業の初めに目標として示すことが望ましいとされる。

中村（2011）は、各題材とDKW、技能は必ずしも1対1対応ではないとし、例えば「ダイナミック」「思

表1 創作ダンスにおける技能の評価規準（細川・佐藤・宮本2005より一部改変）

身体	①	全身	頭や指先まで意識し、身体全体を使える
	②	視線	視線が定まっている
動きの変化と連続	③	動きの大きさ（極限）	身体の中心部から大きく動いている
	④	動きの変化（多様化）	動きに高低の変化がある・体幹を捻じる動きがある・体幹の面を変える動きがある
	⑤	空間	空間（フロアー）移動が大きい・空間（フロアー）の使い方を工夫している
	⑥	時間	速い動き、ゆっくりした動き、ストップモーション、スローモーションなど、動きの速さに変化がある
	⑦	力	動きに強弱やアクセントがある
	⑧	動きの連続	動きの種類や形、速さに変化を持たせて繰り返す
	⑨	つながぎ	動きのつながぎがスムーズで、なめらかである・気持ちもとぎれずに動き続けることができる
イメージ	⑩	イメージとの関わり	イメージにふさわしい独自の動きを創り、なりきって踊ることができる

表2 学習者に評価の観点を与える、「よい動き」チェックリスト（宮本2005より一部改変）

全身	指先やつま先まで意識して体を使える
視線	視線がしっかり決まっている
極限	自分の精一杯の力で大きく動いている
変化	高低の変化や、体を捻る、体の面を変えるなどの動きがある
空間	空間の移動が大きい、または工夫している
時間	速い動き、ゆっくりした動き、ストップ、スローなど動きの速さに変化がある
力	動きに強い動きや弱い動きやアクセントがある
連続	動きが単発ではなく、変化を持たせてくりかえす
つながぎ	動きのつながぎ方がスムーズで気持ちもとぎれず動きつづける
イメージ	イメージにふさわしいオリジナルな動きを創り、なりきって踊ることができる

表3 DKW（技能の目標）と運動技能とのつながり（中村2021をもとに筆者作成）

DKW（ダンスキーワード）		運動・創作技能
デッサン	特徴を捉えてすぐに動く	主題を見つけ対象の観察から特徴を捉えて動きで表す
デフォルメ	動きを変形して強調する	描写・表現、変形・誇張、感情・抽象表現
心情・思考	心情や価値観を捉える	変化のある動きの連続「ひと流れの動き」からイメージ・主題につなげる
ひと流れ	動きのフレーズ感	対極の動きの連続、スピード・大きさ・面・力性の変化と空間延長
ダイナミック・思いきり	精一杯大きく動く	質感のある動きからイメージ・主題につなげる、感情を伴った主題の表現
メリハリ	違いを明確に動く	多様な感じ、動きの質（複合要素）の変化
動きの質	質感の違いを意識して動く	群（集団）の構成を工夫してイメージ・主題を強調する
なりきり・感じを込めて	そのものの気持ちになって動く	群（集団）の動き、群構成・関係の変化
空間の変化	空間を大きく使う	もの（小道具）を何かに見立てて表現する、動きを強調する
対比	相手との関係を強調する	ものを使った多様な動き・効果
感じ合い	仲間の動きに呼応する	はこびとストーリーの展開、はじめ-なか-おわりの構成
見立ての世界	ものの性質を生かす	
空間延長	身体ゾーンを広げる	
中核	一番表したいことを中心に	
クライマックス	ドラマティックな展開	

いきり」は羞恥心をはねのけて精いっぱい大きく動くという態度にもかかわる目標であり、最も基本的な技能の目標と捉えている。さらに「メリハリ」は動きの緩急だけでなく、空間や作品のはこびのメリハリなど、すべての表現に通じる技能の目標であるとする。そして中村は「学ぶべき技能の目標を明確に示すことで、生徒の学習効率は格段に上がる」とし、各技能の教授に最適な題材を選び一つずつ提示していくことを推奨している。さらに一度学習したDKWは次時以降も繰り返し言葉かけして意識させることで、技能（運動・創作）への理解を深めることが出来ると述べている。

こうした短いキーワードによる目標提示は、課題として目指すこととその達成が中学生向けとしてわかりやすいだけでなく、教員自身にとっても指導方法や評価方法が明確になることが予測される。キーワードによって毎時ごとに目指す技能の簡潔な提示がなされることで、結果的に技能指導と評価が行いやすくなると考えられる。また、キーワードが具体的にどのような動きの技能を指示しているのか、教師自身が動いて例示したり、生徒同士の動きの見合いを行ったりすることによって、自己の内的な身体感覚としての理解と、動きとして表れた時の見え方を視覚的に理解するという、二側面からの理解が促されることが予測される。DKWとしてのダンス技能への深い理解は、単に自己の動きで実践できるということだけではない「知識」の定着も含んでいることが予測される。このように、中学生のダンス授業においては、まず基礎となるダンスの動きの技能を丁寧の一つずつピックアップしながら毎時ごとの定着がはかられることが望ましいとされていることがわかる。

3-2. 「思考・判断・表現」

創作ダンスにおける「思考・判断・表現」は、改訂前と改訂後の捉え方に大きな変化はないが、教師が何をみて評価するのかという、具体的な評価観点について述べることにする。

創作ダンス授業においては、DKWとして示されたダンスの技能を応用した、動きの発案、作品創作時の試行錯誤のプロセスや、発表された作品の内容が評価対象となる。特に、動きのアイデアを出したり、その中からふさわしい動きを選択・判断、調整・工夫したり、生徒同士で創作への意見を共有するといっ

た過程が、「思考・判断・表現」の学習として合致するといえる。こうした創作活動中の行動や作品発表の様子を毎回の授業ごとに教師が観察し、生徒の形成的な評価につなげることが望ましいだろう。さらに生徒自身による自己評価も学習目標達成をみるのに重要な要素となる。これは授業後のワークシート（振り返りシート）記述から読み取ることが可能である。生徒は授業で提示されたDKWの理解や実践、「思考・判断・表現」のプロセスについて言語化することにより、創作ダンスの学習内容や自己の学習過程のより深い理解が促されると予測される。松本・中村（2021）は、教師は単元や1単位時間の授業を通して絶えず「見取りと評価」を行うとし、一人一人の学習状況を観察しつつ、学習カードの記載から個人の目標や課題、その解決状況、自己評価と他者評価を読み取ることが示している²⁵。

山崎（2020）は創作ダンス授業における「作品創作」と「即興表現」の特性から、特に「即興表現」時の「思考・判断・表現」を評価することの難しさを指摘している²²。「自分たちの今ある力で踊る→技能を確認する→それを使って動きをより良くしていくにはどうしたらいいのかを考え、自由に踊る」という授業展開において、学習者は動きのポイントを理解し「何に着目して何を工夫するのか」が明確となっていく、という思考のプロセスが生まれるとされる。複数回の授業にわたって、前時の工夫を生かしさらに工夫を重ねるといった往還的な思考が存在しており、こうした学びの積み重ねも「思考・判断・表現」の評価から読み取ることができる、と述べている。これらを学習者が記述できるよう、ワークシートには「着目した点」「工夫した点」の自由記述を設け、記述内容に思考プロセスが可視化されることを確認している。しかし、中学生という発達段階から考えても、授業内の出来事や身体感覚、創作過程での気づきを常に適切に言語化することは困難な場合もあると予測できる。したがって、教師は授業時の学習者の言動の観察から評価することも必須である。山崎がこうした授業時の見取りは容易ではないと指摘していることから、「思考・判断・表現」の評価においても、「知識・技能」の評価同様、教員のダンス経験や専門性が問われると推察する。

4. ダンス教員への質的調査

これまで述べてきたように、創作ダンスの授業は指導法に加え、その学習目標及び評価観点にも、高い専門性が求められ、生徒の動きや記述内容から学習内容や思考プロセスを読み取ることが容易ではないことがうかがえる。ここで、ダンス授業の指導歴が長い体育科教員へインタビュー調査を行い、ダンス授業を実施する教員がどのような指導観点をもってダンスを指導し、個別の評価へつなげているのかを調査し、創作ダンスの適切な目標設定と評価方法のつながりについて明らかにすることとする。

4-1. 調査概要

調査期間は2022年8月であり、調査対象は現在東京都の共学中学校の体育教員である女性教員1名（以下A教員）とした。A教員の教員歴は約32年であり、着任時から複数の中学・高校においてダンスの授業指導を継続している。現在担当している中学1・2年のダンスの授業は主に創作ダンスを中心としながら、現代的なリズムのダンスやフォークダンスの単元を取り入れている。

調査は筆者の所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4-2. 方法

調査はダンス授業の評価観点、A教員のダンス授業への教育観に関する質問を中心とした非構造化イン

タビューとして実施し、インタビュー時間は約60分であった。プライバシーに配慮し、個人名や学校名が特定される内容については分析対象としていない。

分析手法として、質的分析法SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いることとした^{25, 26}。SCATは質的分析法の中でも少ないデータ数の分析が可能であり、分析手順が可視化され明示的であることから採用に至った。

本研究では、A教員のダンスの教育観に関する語りの中から、ダンスの授業における「知識・技能」「思考・判断・表現」の捉え方および評価方法に関係する内容を分析対象として抽出した。インタビュー回答の逐語録から、該当する語りのテキストをセグメント化し、4段階のコーディングからテーマ・構成概念を導いた上で、ストーリー・ライン作成と理論記述がなされた。分析対象としたセグメントは「知識・技能」が13、「思考・判断・表現」は7であり、コーディング、ストーリー・ライン作成、理論記述の分析作業は、筆者と舞踊教育学研究を行う大学院生1名、およびA教員との協議の元で行った。

4-3. 結果

A教員へのインタビューをSCATの手順によって分析した結果、「知識・技能」は27、「思考・判断・表現」は19のテーマ・構成概念が抽出された。ここでは、「知識・技能」のテキスト分析の抜粋を表4に示す。さらに、コーディングから作成されたストーリー・ラインおよび理論記述を表5、6に示す。

A教員は、ダンスの「知識・技能」について、特に「メリハリ」「ダイナミクス」「デフォルメ」を技能の根幹として捉え、技能の習得と同時に作品鑑賞時の観点としても提示することで、知識・技能の体験的な理解を目指していることが示された。ダンスの技能評価は、教師がダンスの審美性を理解していない限り困難であることが語られ、教師の未理解が指導・評価の困難さ、指導法の形骸化につながる事が予測されていた。そして「思考・判断・表現」について、A教員はワークシートの記述内容と授業時の生徒の動きを照らし評価しており、生徒の「思考・判断・表現」のプロセスが可視化されるよう多面的な工夫を行っていることが明らかになった。

5. 総合的考察

ここまで、創作ダンス授業の評価観点について、「知識・技能」「思考・判断・表現」の二側面から文献資料を精査した。文献から得られた知見と、A教員の語りから得られたそれぞれの評価観点と指導観を基に、創作ダンスの評価について考察していくこととする。

5-1. 「知識・技能」の評価観点

ダンス授業における「知識・技能」の学習目標として、キーワード化されたダンスの技能の理解と実践、そして作品創作への応用が挙げられる。A教員によると、授業内でよく使用するDKWは「メリハリ」・「ダイナミクス」・「デフォルメ」の他、「ひと流れ」、「極限」などが提示され、細川ら(2005)、中村(2011)の示す創作ダンスの技能概念と一致する。さらにA教員は目標明確化と技能の定着のために、核となる技能ポイントをまず先述の3つに絞り、特に強調しながら段階的に指導していることが示された。つまり、A教員の指導の特性として、キーワードを絞り簡潔に伝えつつ、実践の中でその本質が定着されるように、単元の中で繰り返し使用していることが示唆された。

さらにA教員は、技能理解によって身に着いた動きの捉え方について、他者の動きや作品を見る際の手

表5 A教員へのインタビュー結果：「知識・技能」の指導及び評価観点

ストーリー・ライン	<p>「A教員は中学校でのダンス授業について、【単元を通した技能の根幹としてのメリハリ・ダイナミクス・デフォルメ】を重視しており、【技能の基本概念的段階的指導】を心がけながら、【心身を投じた技能習得への取り組み】および【技能理解と応用】を目指し指導している。こうした指導により、【群舞創作や作品鑑賞に共通する観念の核】が、【客観・主観の両面からの理解】によって習得され、【技能応用と情調表現への発展】へとつながると考えている。つまりダンス授業における【知識・技能の体験的理解】が促され、【多角的な身体の捉え方の経験】によって、【ダンスとしての審美性】および【総体的に洗練された動き】が学習されるといえる。技能・知識の評価について、【記述試験による知識評価の困難性】を指摘し、【評価方法の乖離】が解消されないとする。技能評価について、【ルーブリック評価の特性】を踏まえると、より【複合的な運動評価の実施】、【総体的な動きの達成評価】が求められる。しかし、【ダンスにおける評価観念の不明瞭さ】がゆえに、【言語化が困難な審美性を踏まえた評価観念】を教師が持つことは容易ではないとしている。評価に際しては【生徒の創作進度・理解度に応じた教師の巡視および介入】を実施しているが、一方で【教師による見取りと評価の困難性】を感じている。体育科の学習では、【教師の指導への応答を左右する生徒の習熟の差異】を踏まえた、【単元特性に応じた尺度の必要性】を感じている。ダンスの授業は特に、【ねらいを意識した動きへの意欲とその見取り・評価】が求められ、【教師の知識・技能の身体的理解と見取り・評価の関連】を知るべきである。ダンス授業の指導に困難さを覚える教師は、【学習目標およびねらいの未理解】、【技能の根幹要素の指導方法】の未習得が原因であると考えられており、A教員は【教師の未理解による指導法の形骸化への懸念】を示している。」</p>
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> ・ダンス授業の運動技能は「メリハリ・ダイナミクス・デフォルメ」の3観点を中心として捉えられる ・ダンス技能の基本概念的は学年に応じて段階的に指導され、心身を投じた実践を通し、理解と応用を促している ・技能理解は創作や鑑賞に共通する動きの観念を培うことへつながり、技能理解・習得を通してダンスの審美性や総体性を主観・客観の両面から思考できるようになる ・ダンスの審美性の完全な言語化は困難であるため、ダンスの評価観念の不明瞭さが解消されていない ・知識面の評価は記述式の試験の得点を主とし、技能評価は授業時の見取りを主としている ・ダンスの知識・技能の身体的理解が未達成の教員の場合、ダンスの学習目標及びねらいの未理解や、技能指導と見取り・評価が結びつかないといったことへつながる ・教師によるダンスの技能の未理解は、指導法や評価法の形骸化を招くと予測される

表6 A教員へのインタビュー結果：「思考・判断・表現」の指導及び評価観点

ストーリー・ライン	<p>A教員は「思考・判断・表現」のプロセスの評価として、【授業ごとのねらいの理解・達成感、思考・観察を経た気づき】や【目標とする到達点への意識】の生徒による記述を重視している。【技能習得と知識的理解の接続】が重要ではあるが【身体的理解および言語化の困難さ】も実感しており、【自己評価】を重視した記述の蓄積により【ワークシートのポートフォリオ化】を試みている。また、【映像共有】によって【自他の客観的評価を通した振り返りと気づき】を行い、【短時間の創作活動における技能応用への思考】を育成している。さらに【授業課題への即応的な動き】が求められる課題では、【知識・技能の蓄積と新たな応用】が必要であり、【教員の支援】によって【教師-生徒間の身体的応答による「思考・判断・表現」】のプロセスをみることが出来る。そして、【相互鑑賞と相互評価の記述】を求めている中で、生徒は【気づきおよびねらいの言語的理解】が促されており、教師は生徒の記述から【言語的理解と身体的な動き両面からの見取りと照合】を行っている。ワークシート課題を【デジタルによるやり取り】によって実施することで【生徒の理解度・動きを見る目・発想の可視化および共有】が目指されている。</p>
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> ・「思考・判断・表現」の評価として、ワークシートの記述内容を重視しており、ねらいの理解・達成、気づきの記述を求めている ・技能の身体的理解と知識的理解の接続は容易ではないと考えているが、映像共有は自他の客観的評価を促し、生徒の思考・判断の一助となる ・「思考・判断・表現」のプロセスは、ワークシートの記述だけでなく、知識・技能の蓄積と応用によって導き出される身体の応答のものにもみることが出来る ・教師はワークシートの記述と授業時の動きの見取り・照合を通して「思考・判断・表現」のプロセスを評価している ・デジタル上の映像共有およびワークシートの入力、生徒間の相互鑑賞と相互評価を支援し、生徒の思考の可視化が実現する

掛かりにもなることを示し、ひとつのDKWがさまざまな場面で応用できるような支援を行っていることも明らかになった。生徒は授業時の技能実践と創作、映像鑑賞を繰り返すことによって、ダンスの「良い動き」としての審美性を総体的に見る目が徐々に養われていくといえる。また、「メリハリ」の指導の際、「心（も含めた）、全身で止まっていること」を意識させるよう言葉かけをしていることが語られている。細川ら（2005）、宮本（2005）の「良い動き」の10観点に照らし合わせると、技能としては①「全身」や⑥「時間」へつながるテクニックであるが、言葉かけによって同時に②「視線」、⑩「イメージ」を意識した動きへの発展を視野に入れていることがわかる。このように、運動特性としてのDKWを示しながら、実際の指導場面においては言葉かけによって「良い動き」を多面的に捉えられるような観点の育成と、「良い動き」の体現を目指せるよう工夫していることが見て取れた。

「技能」の評価観点としては、授業ごとの技能習得達成度を教師が授業指導時および記録映像から観察し、その観察内容を記録することによって技能評価が行われていることが示された。さらに「知識」は、記述式のペーパーテストによって、授業で習得されたダンスの技能概念や動きの観点について言語的に理解しているかどうかを見ていることが語られた。つまりダンスの学習目標として、生徒一人一人が授業を通してダンスの動きの捉え方を技能として身につけつつ、知識として言語化できるようになることを目指していると考えられる。

5-2. 「思考・判断・表現」の評価観点

「思考・判断・表現」の学習目標として、DKW課題を基にした動きの選択や判断、工夫、生徒間の協働、作品発表が適切に行われることが挙げられる。評価は、創作活動時の試行錯誤のプロセス、作品内容、発表時の様子を見取りと、ワークシートによる生徒自身の自己評価・他者評価が観点となることが明らかになった。A教員は「思考・判断・表現」を見る上でワークシートや学習カードの記述を重視し、学習目標としての技能習得にあたって、どのようなことに気づき思考したかを可視化し、授業時の動きと照らし合わせるよう心掛けていることが示された。ICT化に伴う授業時の映像共有は、生徒が自分の動きを客観的に見ることと同時に、他者の動きや作品も落ち着いてじっくりと観察することを可能にし、学習内容の反芻を促し、より定着されやすくなると推察され、こうした自他の客観的な評価によって、生徒の思考・判断がより深いものになることが期待される。このようにA教員は、デジタル上の学習カードやワークシートの活用によって、授業内または授業外における生徒の「思考・判断・表現」プロセスを可視化し、それを評価の対象としていると考えられる。

A教員はさらに、定着した知識・技能をどのように応用し、創造的に発揮されるか、という点は、身体の応答、動きそのものの観察で評価すると語る。つまり授業から生徒それぞれが何を学んだのか、そして学んだことや思考したことをどのように身体で表現してくるか、という、教師－生徒間のやり取りの往還に「思考・判断・表現」のプロセスを見ることができるとしている。ワークシートの記述内容は重要な評価対象であるが、生徒の「思考・判断・表現」がすべて言語的な表現に集約されるわけではなく、授業内で見られる身体的な試行錯誤や動きへの反映、即興的な動きの応答も評価の対象として重視されていることがうかがえた。

以上のような評価をするにあたり、教師はダンスの創作前や創作時の助言やアイデアの補助、フィードバックなどによる適切な介入が求められると考えられる。また、生徒が記入しやすく、且つ生徒自身の思考・判断のプロセスが客観的に読み取れるワークシートの設定も重要であるだろう。以上のように、ダンスの「思考・判断・表現」はワークシート記述内容と授業時の観察の両面からの評価が求められることが

示された。

5-3. 多面的な評価の必要性

A教員はダンスの「知識・技能」「思考・判断・表現」の双方において、授業時の実践の観察と授業後の振り返りの記述の両面から評価を行っていることが明らかになった。中央教育審議会においては、改訂後の学習評価について以下のように示されている²⁷。

「三要素のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組みさせるパフォーマンス評価を取り入れ、ペーパーテストの結果に留まらない、多面的な評価を行っていくことが必要である。さらには、総括的な評価のみならず、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを、例えば、日々の記録やポートフォリオなどを通じて、子供たち自身が把握できるようにしていくことも考えられる。」

このように学習評価そのものにおいて、今後はよりいっそう多面的な評価が求められることがうかがえ、ダンス授業の評価においても、パフォーマンス評価として多角的な観点から生徒の学習の質を捉える必要があるだろう。また、生徒自身が学習を自己評価し、学習の質を捉えられるよう、学習の記録がポートフォリオとして蓄積されることが有効であるとされ、ダンス授業におけるワークシートの役割についても、さらなる検討が求められるだろう。浅田ら（2021）は、ポートフォリオ評価について、知識やスキルの活用・応用・統合することを求め評価するパフォーマンス評価と関連づいていることを前提に、「（ポートフォリオ評価は）まさに子どもの学習過程の成果を一人一人に即してできる限り評価しようとするためには不可欠なアプローチと思われる。したがって、この評価はポートフォリオを様々な視点から検討し解釈することが求められる評価であり、教師と子どもとの協働によってはじめて成り立つ評価であるだろう。」と述べる²⁸。ダンス授業におけるワークシートをポートフォリオ評価の対象となるような位置づけにする場合、生徒の気づきや技能の応用、思考・判断・表現のプロセスやその自己評価が簡潔に記述されるような構造であることが求められるだろう。ここでは、目標到達度を教員の視点だけで評価するのではなく、生徒同士の相互評価や、それを踏まえた生徒個別の自己評価も、ポートフォリオ評価の対象となる。

浅田らが「子どもの学びは多面的であり、その学びの経験が一人一人の自己を形成していくことに意味があるために、その学びをできるだけ評価できるようにしなければならない。それが、ゴールフリー評価やポートフォリオ評価の本来の意義であるだろう。」と述べているように、ダンス学習の「知識・技能」「思考・判断・表現」のどちらにおいても、言語的な記述に表れる面と、動きや創作行動に表れる面の、双方からの丁寧な見取りが必要である。したがって、例えば作品発表会の授業のみが主な評価対象となるなどの偏りはなくし、単元を通し、複数回の授業の積み重ねの中で形成的な評価をすることがのぞましいと考えられる。

5-4. 教師に求められる専門性

A教員がインタビュー回答で指摘するように、生徒個々の動きの観察から技能評価を行うことは容易ではなく、まず教員自身により知識・技能の身体的理解がなされている必要があることがわかる。また体育科全体の評価視点の不明瞭さについても言及されているが、まず学習目標となる技能の基本概念を、教師自身も動きの中で習得していることが求められるだろう。さらにダンス授業の技能目標として、「感じを

込めて踊ったり、みんなで自由に踊ったりする楽しさや喜びを味わうことが示されており、教員自身が運動技能だけでなく、感じを込めて踊ったり他者と自由に踊る楽しさや喜びを、身をもって経験していることによって、初めてダンスの本質をとらえた指導が可能になるといえる。

ダンス学習において、教員の技能への理解が未達成のままである場合、創作型学習としての創作ダンスの授業の遂行は困難であり、結果としてA教員曰く「パッケージされたもの」としての模倣型・習得型の授業を選択せざるを得ないという状況に陥ると考えられる。つまり技能・知識について未理解のままでも評価が可能となる方法を教員が求めることによって、指導法や評価法の形骸化につながるものが懸念されているのであり、この傾向は今後も続く可能性があるだろう。

したがってダンス未経験の教師が学習目標設定、指導、評価評定を適切に行えるような方法を模索するべきである。薄井ら（2017）によると、教員によるダンスの授業の取り組みやすさは、教員になる前のダンス経験の有無が影響しており、教員になってからの研修の有無は影響しないという結果が出ている²⁹。教員へ向けた効果的な研修の在り方に加え、教員養成の段階においてどのようにダンスの専門性を身につけるかという課題があることが見て取れる。ダンスの授業では、生徒の学習段階や習得の度合いに応じながら、段階的に丁寧な指導を行うこと、そして生徒の多角的な学びを取りこぼさないような見取りが重要であるが、そのためにはまず教員が自身の身体を通してダンスの知識・技能を身につけ、踊ることの楽しさを経験していなければ指導そのものが困難となる。ダンスに限らずどのような単元においても学習目標の基礎となる基本技能を身につけることが必須であるが、創作ダンスにおける技能を身につけるための、教員養成における指導法についてさらなる検討が必要である。

6. まとめ

本研究では、指導要領改訂後の創作ダンス授業における学習目標と評価について、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の二側面に焦点を当てて検討してきた。ゴールフリーとされる創作ダンスは、自由で創造的な表現が目指される一方、技能や思考・判断の評価・評定を行わなければならないという一種のジレンマが存在しているといえ、体育教員は、ダンス授業において他競技とは異なる観点から見取りを行うことが求められる。ベテランのダンス教員であるA教員は、技能をキーワード化し簡潔に伝え、技能の習得度合いを生徒も教師も観察しやすくしていることがわかり、学習目標の提示・共有によって技能習得と評価とのつながりを生む工夫をしていることがうかがえる。こうした方法はルーブリックによる目標提示・評価へもつながる可能性があるとも予測されるが、A教員は中学1・2年生という発達段階を考慮し、技能概念をひとつひとつ丁寧に習得させ、徐々に総体としてのダンスの「良い動き」を知識・技能の両面から理解させることを念頭に置いていることが推察される。ルーブリック表のような形で技能を生徒に示す場合、どの指導段階でどのような技能概念を示すべきか、教員が詳細に吟味していなければ効果を見込めないことも考えられる。

創作ダンスの単元は現代的なリズムのダンスやフォークダンスと比べ、特に「技能」の捉え方が抽象的であり、評価を困難にしているともいえるが、「創作型学習」としてもっとも多角的な学習が可能な単元であるとも捉えられる。したがって、生徒の多角的な学習の質を取りこぼさずに評価するために、教員はダンスの審美性を踏まえた創作ダンスの「知識・技能」を体験的に理解した上で、技能習得における「思考・判断・表現」のプロセスも含めて授業時の様子から丁寧に観察する目が求められる。こうしたダンスの専門性は、教員養成課程や教員研修会などでどの程度高められることができるのか、今後さらに具体的な調

査が必要であるだろう。

注（引用参考文献は注に含む）

- 1 中村恭子（2010）「中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望 東京都公立中学校を対象とした調査から」, 順天堂スポーツ健康科学研究 1 (4) (通巻16号), 472-485.
- 2 山口莉奈, 正田悠, 鈴木紀子, 阪田真己子（2017）「体育科教員のダンス指導不安の探索的研究」, 日本教育工学会論文誌41 (2), 125-135.
- 3 高橋和子（2016）「改訂期のダンスでいま、何が、どう問題か」, 『体育科教育』2016年3月号, 大修館書店, 16-19.
- 4 松本富子, 中村なおみ, 小林峻（2013）「ダンス指導法実技研究にみる現職教育の成果に関する検討」, 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編48, 105-117.
- 5 酒向治子, 竹内秀一, 猪崎弥生（2016）「中学校保健体育科の男性教員のダンスに対する意識—語りの質的検討—」, スポーツとジェンダー研究14, 6-20.
- 6 熊谷佳代, 中川裕紀子（2014）「岐阜県の中学校におけるダンス授業の現状と課題」, 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究16, 21-28.
- 7 文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説（平成29年告示）, 6-7.
- 8 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会（2019）「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）3. (2)「観点別学習状況の評価の改善について」
- 9 木原成一郎（2020）「「観点別学習状況」欄の観点から内容が消えた!」, 『体育科教育』2020年7月号, 大修館書店, p.9.
- 10 高橋和子（2017）「ダンス領域の指導実践上の課題解決のための方策 1章 ダンス学習の理論とその背景」 「2. ダンスのある風景」, スポーツ庁平成28年度武道等指導充実・資質向上支援事業, 1-7.
- 11 中村恭子, 武井正子, 浦井孝夫（2003）「ダンス教育の目標に関する研究—高等学校のダンス担当教員の評価にもとづいて—」, 順天堂大学スポーツ健康科学研究 (7), 75-79.
- 12 中村恭子（2009）「中学校ダンスの男女必修化の課題—中学校教員を対象とした調査にもとづいて—」, 順天堂スポーツ健康科学研究 1 (1), 27-39.
- 13 酒向治子（2020）「激動の時代に向けたダンス教育の意義」, 『体育科教育』2020年12月号, 大修館書店, 12-15.
- 14 高田彬成（2020）「新しい学習評価の手順」, 『体育科教育』2020年7月号, 大修館書店, 16-19.
- 15 梶ちか子, 松元隆秀, 佐藤豊, 金高宏文（2019）「大学教育における単元構造図を用いた授業設計方法の提案 —体育系大学における「ダンス」の実技授業を例にして—」, 鹿屋体育大学学術研究紀要57, 17-28.
- 16 梶ちか子, 松元隆秀, 金高宏文（2020）「表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図」の提案」, 九州体育・スポーツ学研究34(1), 9-25.
- 17 梶ちか子, 松元隆秀, 金高宏文（2021）「体育系大学のダンス授業における技能評価力を高める授業実践事例—表現系ダンスの「技能評価観点構造図」を手がかりとして—」, 九州体育・スポーツ学研究35(1), 23-35.
- 18 相馬秀美（2018）「教員養成系大学における現代的なリズムのダンスの指導法授業に関する一考察—ループリックの有用性の検討を通して—」, Research Journal of JAPEW 34, 39-51.
- 19 山崎朱音, 新保淳, 柳怡奈, 石貝孝洋（2020）「保健体育科における「思考力・判断力・表現力」の評価方法の研究—創作ダンス授業を事例として—」, 静岡大学教育実践総合センター紀要30, 147-156.
- 20 山崎朱音（2020）「「思考・判断・表現」の評価」, 『体育科教育』2020年12月号, 大修館書店, 32-35.
- 21 全国ダンス・表現運動授業研究会（2021）『明日からトライ! ダンスの授業改訂版』, 大修館書店
- 22 細川江利子, 佐藤みどり, 宮本乙女（2005）「創作ダンス授業における学習者の技能評価—技能評価規準作成の試み—」, 舞踊教育学研究 7, 3-17.

- 23 宮本乙女 (2005) 「創作ダンス授業における学習者によるパフォーマンス評価の研究」, お茶の水女子大学附属中学校紀要34, 65-86.
- 24 全国ダンス・表現運動授業研究会 (2021) 前掲書, 中村恭子 「ダンス学習の内容と方法」, 第Ⅲ部理論編第8章, 140-143.
- 25 大谷尚 (2008) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法」, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学) 54(2), 27-44.
- 26 大谷尚 (2011) 「SCAT : Step for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」, 日本感性工学会論文誌10(3), 155-160.
- 27 中央教育審議会 初等中等教育分科会 資料1 教育課程企画特別部会 論点整理 「3. 学習評価の在り方について」
- 28 浅田匡・古川治編著 (2021) 『教育における評価の再考—人間教育における評価とは何か—』, ミネルヴァ書房
- 29 薄井洋子, 任曉晨, 柳田恵梨奈, 佐藤克美, 渡部信一 (2017) 「保健体育科教員のダンス教育に対する意識調査」, 教育情報学研究16, 69-75.

